MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２２．７．１３　発行元
第 375 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

歴史・時代ミステリその２

第３７０号に続いて「歴史・時代ミステリ」の第二弾。前回も書いたように、日本ミステリの中には「歴史テーマ」に関するもの、設定が「過去」になっているものはたくさんある。その中から印象深いものを選定。

江戸時代の題材が多いか？

ミステリの範疇に納まる「捕物帳」を含めれば圧倒的に江戸時代の作品が多い気がする。次いで戦国時代であろうか。あとは幕末から明治維新の時期になるだろうか。今年のＮＨＫの大河ドラマ『鎌倉殿の十三人』の時代は取り上げられる回数は少ないところかもしれない。

江戸時代の元号、３７あるようだが、さっぱり憶えていない。主なところだと慶長(1596 年から)、明暦(1655 年)、元禄(1688 年)、享保(1716 年)、明和(1764 年)、天明(1781 年)、寛政(1789 年)、天保(1830 年)、安政(1854 年)、慶応(1865 年)などとなる。元号を見ただけで前後関係がわかるというのは私には無理のようである。

図書館に行くと、歴史関係の雑誌も並んでいるし、歴史関連本もたくさんある。余裕があれば…とは思いつつも、一冊借りてくるとそれだけでかなりの時間を取られる。興味のあるところに絞っておかないと大変なことになってしまう。

明治以降の近代まで幅を広げると必要な知識は更に膨大になる。私のように生きてくると昭和の出来事も十分「歴史」になっている気がする。「歴史から学ぶ」だな。

井沢元彦『義経幻殺録』

１９７６年講談社『推理特別書下ろし』企画の中の一冊。井沢元彦はデビューした最初の頃はほとんどの作品が歴史ミステリだった。

本書の主人公は芥川龍之介。大正十年の上海が舞台。平安末期の歴史上の出来事を書いているわけではない。「義経伝説」の発展から、チンギスハン説のことも出てくるし、中国清王朝の祖・ヌルハチ関連の話も登場してくる。その上、古文書やロシア・ロマノフ王家の秘宝などと盛りだくさん。おまけに菊池寛や山形有朋、明智小五郎まで出てくるという豪華版。消えたダイヤモンドの行方を探すなどの事件に取り組む。井沢作品としてはこの後に同じく講談社から『義経はここにいる』という本も出している。

多岐川恭『異郷の帆』

１９６１年新潮社。私の手元にあるのは１９７７年の講談社文庫。学生時代に読んだ日本の時代ミステリの代表と言えばこの本。ミステリ史に残る名作と言えるだろう。比較的薄い本で、中身もわかりやすくスッキリ。なおかつ謎解き要素も堪能できる作品。

元禄の時代。舞台は長崎の出島。主人公は若い小通詞の浦恒助。鎖国の日本の唯一の開かれた港・出島で仕事をしながら、世界に羽ばたきたい思いに駆られている。そんな時、オランダ商館次席商館員のヘトル(ファン・ウェルフ)が自室のベッドの上で刺されて死んでいるのが発見される。ヘトルは密輸のうわさがあった人物。続いて混血美女のお幸の部屋で小通詞仲間の富野佐吉がのどをかき切られて死んだ。その部屋には元はポルトガル人(クリストファ・ラザルス)の西山久兵衛と丸山遊郭から通ってくる遊女の小花がいた。奉行所の疑いは西山と小花とお幸にかけられた。西山は転びキリシタンで、その動物的な行動で物語の重要な構成要素になっている。西山の妻の菊も印象的な人物。さて、主人公の浦は混血美女のお幸に好意を抱いており、これも物語の大切な軸に位置づけられている。出島としいう閉鎖された空間は「密室」と捕らえることもできる。江戸時代の異国情緒も十分に描きこまれており、小説としての完成度が高い。

田中啓文『鍋奉行犯科帳』

２０１２年集英社文庫。この集英社文庫には田中啓文の『笑酔亭梅寿謎解噺』シリーズ、『浮世奉行と三悪人』シリーズなどが入っている。黄緑色の背表紙がずらり並んでいると壮観。この『鍋奉行犯科帳』シリーズもその一連の本ということになる。

まず第一の特徴は「大阪もの」だということ。「奉行」というと江戸町ばかりが取り上げられるが、本シリーズはわざわざ大阪を舞台にしている。「江戸」「京都」に負けない「大阪」を主張している。「寛政の改革」の少し後、大阪西町奉行所に新しい奉行が赴任してきた。大邉久右衛門。言動全てが型破りで、大食漢であり美食家である。何よりも食べることが重要で、本書ではフグ料理、ウナギ蒲焼、鰹節、餅上菓子と食い倒れの話が続く。作者はこの時代の料理について書きたいのだと思ってしまう。でも、各編の話の後半はミステリの部分になって、江戸時代の決まり事に沿った人々の考え方やしきたりが土台になった推理を展開する。これがまた「なるほど!」と思わせる内容を伴っているのだ。田中啓文は物語作りが上手だ。